



日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)関東

文は信なり

No.35

降誕号

定価 100円

発行責任者

本部代表・三浦喜代子

JCP 事務局

〒131-0043

墨田区立花 4-6-13

TEL&FAX 03-3616-8621

郵便振替 00170-0-61838

HP: <http://jcp.daa.jp>

一二月二五日を巡って

三浦 喜代子

今では世界中どこでも一二月二五日はイエス・キリストの誕生日として知れ渡っている。しかし、この日にイエス様が誕生されたとは『聖書』のどこにも明記されていない。唯一の手がかりは『ルカの福音書』に、羊飼いが野宿していた時だったと書かれているだけである。それは三、四月から一月の時期に当たるといわれる。

当初、初代教会はキリストの誕生を特に祝う必要を感じていなかった。それよりも毎週の「主の日」の礼拝を重んじ、年に一度、キリストの死と復活を記念する「イースター」を盛大に祝っていた。

しかしキリストの救済行為はこの世への来臨から始まったのであり、誕生の瞬間にすでに神のことがこの世に來たのであるとの正統的キリスト論により、教会は四世紀の初めまでは一月六日に祝うようになった。

この日付は当時の非キリスト教の祭りや異端を含めたキリスト教派の習慣を受け継いだものである。エジプトでもシリアでもパレスティナでも、教会は一月五日から六日にかけて盛大に降誕祭を祝った。実際にその日、キリストが生まれたかはあまり問題ではなかった。しかし三百年が経過する間に実際の誕生日を探る様々な試みがなされた。

では、いつ、どこで、一二月二五日に定められ、降誕祭が行われるようになったのだろうか。おそらく三二五年と三五四年の間、場所はローマであるとほぼ確実に考えられている。三二五年、ニカイア公会議で「受肉」の教義が確立して以来、降誕祭の特定の日付を決める必要があった。

当時ローマでは太陽神を崇拝する教えが普及しており、冬至に当たる一二月二五日に祝祭をしてきた。キリストは闇を照らす光である。ローマ教会は降誕祭を独自の光の祝祭として異教の太陽崇拝に対抗したのである。

『あなた方には義の太陽が昇る』というマラキ書のことばはキリストを予言したものである。ミラノの司教アンブロシウスは「キリストは私たちの新しい太陽である」と説教し、アウグスティヌスも「この日は太陽を創造したお方を拝むように」と勧めた。

さらにコンスタンティヌス大帝が太陽崇拝とキリスト崇拝を統合しようとした努力も大きい。こうして一二月二五日は異教の祝祭日に由来するものの、キリスト教独自の意味づけをもって広まった。現在ではローマ・カトリック教会とプロテスタント教会以外でも広く祝っている。

参考図書『クリスマスの起源』教文館



【目次】 P1~2 三浦喜代子 P3 駒田隆・山本披露武 P4 志田雅美 P5 槇尚子 P5~6 富岡国広 P6 西山純子 P7 篠田一志 P7~8 土筆文香 P8~P9 三浦喜代子 P9~10 白井淳一 P10 長谷川和子 P11 島本耀子 P11~12 安東奈穂美 P12 編集後記・ほか

ドイツのクリスマス名説教要旨

三浦喜代子

エドゥアルト・トゥルンアイゼン

★ルカの福音書二章一〜一四節★

『恐れるな！』これが降誕祭最初のメッセージであり全体でもある。

私たちはみな恐れを抱いている。四方八方から恐れに囲まれた暗い世界のただ中にいるが、恐れる必要はない。なぜなら『今日、あなた方のために救い主がお生まれになったからである』。神が、ぞつとするような力の働くこの世に、血と肉によって救い主、イエス・キリストを送られたからである。

『布にくるまって飼い葉桶に寝ておられるみどり子を見つめるであろう』。み子がそこにおられる。観念ではなく思想ではなく、実際にみ子が生まれたのである。私たちはみ子を覗き見て、すがりつくこともできるのである。だから恐れることはない！

この降誕の物語は皇帝の命令から始まる。『アウグストから住民登録をせよとの勅令が出た』。この独断的命令に強いられて、ガラヤのささやかな職人ナザレのヨセフは身重のマリヤを連れて旅立った。二人の旅はまことに厳しいものだったに違いない。

今日私たちが、独断的な命令のもとに生き

ている。(注・この説教はナチスの独裁政治が猛威を振う一九三九年のものである)。支配者の命令一下、職業、労働、家庭、学業を置いて武器を取らねばならない。ヨセフとマリヤの身の上に起こったことは今日でも身近なことである。

さらに聖書は続く。『宿屋には彼らの泊まる場所がなかった』。二人はむりやり馬小屋に入らざるを得なかった。そこでさらに厳しいことが起こった。『マリヤは月が満ちて初子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた』。生まれた子は神の永遠のみ子だった。イエス・キリストだった。救い主はこのようにして世に

来られた。政治的権力者の勅令に脅かされるこの世に、神のみ子はお生まれになった。私たちが見捨てられることはないという意味である。み子は来られた、私たちのかたわらに。イエスは最初から小さな弱い子どもとして藁の床に休まれた。この世の冷たさ、厳しさ、卑しさの中に身を置かれた。私たちはひとり捨てられていたのではない、イエスがそばにおられるのだ。それだけではない、降誕物語の奥は深いのである。

これらすべてのことは天におられる神の意志を抜きにしては起こらなかったのである。アウグストも人口調査もヨセフとマリヤの困難な道も馬小屋の産産も、神はご自身の計画

を成し遂げるための道具のように使われた。それは私たちが永遠に救い、私たちに助けと喜びを備えるためであった。ここに『恐れるな』の真意がある。

今私たちが見せつけられている支配者たちの暴力は、神が私たちに救い主を贈る絶好の時であり場所なのである。この世を支配するのは神である。神は、飼い葉桶のおさな子を与えてくださった。決してたじろいではない、神が支配しておられる。私たちになお何を恐れるものがあるうか。

降誕物語に忘れてならないのは天使たちである。天使は神を賛美して言った。『いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ』。ここには主の鮮やかな明るさと栄光が語られている。

天使は言う、この世界は人間の考えをはるかに越えて深く大きい。神の力、神の光、さらにみ使いたちで満ちている、神の世界が私たちを取り囲んでいる。飼い葉桶のおさな子は神の世界からきてくださり、この世界に橋をかけてくださり、絆を結んでくださった。

『恐れるな』はそのことを語っている。『地には平和！』時代の戦いと困窮のさなかで私たちは平和に取り囲まれているのである。神に感謝し、ともに歌い、祈りましょう！

使用図書『光の降誕祭』教文館・加藤常昭訳

クリスマスの帰りみちに

駒田 隆

カトリック信者であり、共産党員でもあった、原爆詩人峠三吉の詩に、昭和二十一年に作った、標題の詩があります。やっと平和な日を迎えて、クリスマスに参加して帰る時の詩です。

焼跡の町に夜の雨は優しく霧をながす／
クリスマスの調べは神話のように心にとも
る／少女とわたしは焼跡の電車を黙って
歩く／

クリスマス礼拝が終わって、心に灯火を灯して帰る時ですが、その夜の町は、今のように喧騒に満ちた町ではなく、電気もあまりついていない焼跡の町でした。

戦後最初のクリスマスは焼け焦げた臭いの
中にひそやかで／神は戦争の悲しみの奥で
お菓子のように美しい／少女とわたしは泥
濘の上を軽わざ師のように渡る／

焼跡に降り注ぐ雨は、壊れたままの道に泥を押し流し、道は泥に覆われていました。

渡ってゆく原爆の廃墟は闇の中で無数にさ
さやく／神と戦争について様々な不協和音
をささやく／少女とわたしは然し黙って鉄
を踏み材木をまたぐ／

原爆で廃墟と化したヒロシマ。その町の道を、二人は生きている幸を噛みしめながら、黙々と歩いていくのです。戦争とキリスト教の関わりを考えながら、平和への道を歩いていくのです。

通過して来たクリスマスの雰囲気は霧雨よりも優しく／生き残った青春は風にゆらぐ
樹木のように重い／この重さに耐えて少女
とわたしは歩く／神があってもなくっても
少女とわたしは歩きつづける／

最後の連は、まるで、全能の神を信じながら、神との関わり合いを模索していたコヘレトの歌です。

でも、神は、イエスを送って、神への道を、示されました。イエスが伝えられた福音は、神への道を教えてくれたのです。

「少女とわたしは」、生き残った重荷を背負って、福音の道を歩いて行ったことでしょう。クリスマスの帰りみちを。明日を信じて。

心が洗われる礼拝

山本披露武

教会に通い始めて驚いたことがたくさんあります。その一つが、イブ礼拝の時にもクリスマス礼拝の時にも、楽しみにしていたイベントがないことでした。

「せめてイブ礼拝の時だけでも」と、提案をしてようやく認められたのはよいのですが、なんとその役が私に回ってきてしまいました。そこで色々と考えた結果、ゲームやクイズ、プレゼント交換等をたくさん組み入れることにしました。

それが子どもたちに受けて大成功！
その実績が買われて、翌年以降もイブ礼拝でのイベントを任されることになり、張り切って引き受けてきました。

しかし何年かしている内にネタがなくなり、役を降ろしてもらいました。その年は、讚美と礼拝のみのさびしいイブ礼拝となり、大変申し訳ないことを思っていました。

ところが、聞こえてきたのが「心が洗われるようで、教会に来てほんとによかった」という初めて来られた人の声です。

一瞬、イエス様の苦笑いが見えました。イベントばかりに気を取られて、一番大切なことを忘れていたのです。そのことに気付かされて、心から反省し、また、感謝をしました。

イエス様からの贈り物

志田雅美

父が脳梗塞で倒れたのはクリスマスの一カ月前の夜でした。幸い病院に運ばれてすぐに意識は戻ったのですが、容態はおもわしくなく医師から「覚悟はしておいてください」と告げられました。

集中治療室に入ると、父はたくさんの管に繋がれて寝かされていました。その姿を見て母は泣き、つられて父も泣きました。わたしは父の手を握り「どうか、父がそのまま死んでしまうことがありませんように」とイエスさまに祈りました。すると、『あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない』というみことばが心に浮び、父は必ず癒されると確信しました。

それから、毎日のように病院へ行きました。母は心労で食事もなく摂れず、日毎にやつれていきました。そのうえ無口になり、ふさぎこむようにもなりました。このままでは母も倒れてしまうかもしれない。そう思ったわたしは、少しでも気分転換になればと「一緒にクリスマス・イブ礼拝に行こう」と声をかけました。

ところが、母はわたしの真意を汲み取ってはいくれず「お父さんが大変な時にクリスマス

もへったくれもないでしょ」と断りました。「おまえは呑気でいいわね。お父さんのことなんかちつとも心配じゃないみたい」と嫌味もいいました。

わたしは「神さまがお父さんを治してください」と信じていると力をこめていいました。母は眉をすりあげ、「信じたからってなんになるの」と怒りました。そればかりか「おまえの信じている神さまにご利益がないからこんなことになったのよ」とわたしを責めました。あまりに理不尽な言葉に、わたしは胸が苦しくなるほどの怒りを覚えました。

それからというもの、家の中が冷たい空気に包まれました。会話のない食卓に、食器のふれあう音と、テレビの音だけが虚しく響いていました。

ふりかえると、これまで何度も同じようなことがありました。そのたびに母を厭い、愛のない自分につまづきました。信仰の友にはイエス様のすばらしさを素直に伝えられるのに、どうして母にはそれができないのでしょうか。なぜ、信じているものが違うというだけで傷つけあってしまうのでしょうか。

こんなことにならなければ、クリスマスにはケーキとチキンを食べて過ごす団らんぐらいいあったかもしれないのに。そう思うと、急に悲しみがこみあげてきました。

わたしはイエス様のみまえに「わたしたちの頑なな心を砕いてください」と祈りました。祈りながら、瘦せて小さくなった母の背中にそつと声をかけました。

「わたし、お母さんに元気を出してほしかったんだ。だから教会に誘ったんだよ。最初からそういえばよかったね。言葉が足りなくてごめんね」

すると、母はふりむいてわたしをじつと見つめ、泣き笑いのような表情でいいました。「なに着て行こうかしら？」

わたしはその時、イエスさまがわたしたちの間に立っていらつしやるのを感じました。クリスマス・イブの日が来ました。

わたしたちはキャンドルの灯った礼拝堂で共にみことばを聴き、イエスさまご降誕を祝い、讃美歌を歌いました。母にはまだほんとうのクリスマスの意味はわからないかもしれませんが。でも、いっしょに教会に行けたことがわたしたちには大きな意味のあることでした。

数日後、父が一般病棟に移ったと病院から連絡がありました。電話を切ったあと「おまえのいうとおりだった」と母が泣きながらいいました。その年のクリスマス、わたしはイエス様からふたつすばらしいプレゼントをいただきました。

ページェント

榎 尚子

クリスマスが来るずっと前から教会学校はページェントの練習を始める。

小さな礼拝堂、でもあふれるほどたくさん子どもが集う教会では、先生たちは役の割り振りに苦心したものだ。どの子も出演させてあげたい、台詞と動きの練習は回を重ねるごとに熱くなっていった。

真奈ちゃんはCS常連の一人だった。クリスチャンホームで育った真奈ちゃんにとってクリスマスは悦びそのものだった。でも、今年はどうな役をしたらよいだろう。今までその他大勢の聖歌隊員が多かったが、その年は小学校を卒業する、最後のページェントなのだ。

真奈ちゃんは特殊学級に通っていた。今年は何をやりたいか聞いてみると、聖歌隊の指揮者がいいという。真奈ちゃんに務まるだろうか。そのときからCS教師と聖歌隊と真奈ちゃんの練習が始まった。真奈ちゃんは先生に合わせていつも大げさに手を振ったが、なかなかリズムとは合わなかった。聖歌隊の歌より先生の指揮を見てから手を動かすのでワテンポ遅れる。なんとかできるようになってしたのは直前だ。

クリスマス会の時、白いセーターを着た真

奈ちゃんは六年生らしく聖歌隊に向かい合った。オルガンのリードに合わせて歌う聖歌隊、少し遅れ気味にタクトを振る。ああ無理だったかな、しかし大人が手助けはできない。ところがどんどん場面が進み、最後の降誕の場面で『きよしこの夜』を歌った時、なんと真奈ちゃんの指揮がびったり合っていたのである。幕がしまつて真奈ちゃんはうれしそうにほほ笑んだ。三年後、真奈ちゃんは洗礼を受けて私たちの姉妹になった。

ドイツの人が大事にしているものが三つある。ルター、グリム童話、讃美歌作詞者のゲルハルトだ。『まぶねのかたえに』は彼の詩だ。格調高い讃美歌でバツハ作曲、これもまた難解だ。真奈ちゃんと讃美したことがある。

まぶねのそばにいたのは羊飼いや宿の人たちや子どもだった。東方の博士も駆け付けた。真奈ちゃんもそこにいた。聖歌隊の指揮を通してイエス様の一番近くでお祝いした。

神様がくださったものを精いっぱいお捧げしてイエス様のそばにいられることが、幸せなのだ。讃美する人の信仰告白の歌である。

真奈ちゃんは人生の重荷を背負って、ある施設にいる。毎週教会に通うことが喜びだ。天国のお母さんは真奈ちゃんの讃美歌を聞いて喜んでおられることだろう。

クリスマスは静思のとき

富岡 国広

三十年以上も前になるだろうか、ある人の言葉が、私の心にずっと残っている。その人は言った。「浮かれて祝いの言葉を乱発するだけでなく、クリスマスには来し方の自分を静かにふり返る時としたいものだ」と。

その真意を知るまでは、私は相も変わらず人と会っても手紙の中でも、「メリー・クリスマス」を乱発するだけで、立ち止まって自分を見つめることなど考えなかった。

しかし、改めてその言葉通りに静思した時、受けるべき財産の先渡しを父親に要求し、遠い国へ旅立った放蕩息子のお話を思い出した。

彼は父親から受け取った金のすべてを湯水のように使い果たし、どん底まで落ちぶれてしまった。彼の悲惨な姿が、そのまま破綻した私の心の状態とびつたり重なってきた。

私は時には他人を見下し、また時にはねたみ、ひがみ、呪い、母親さえも憎んだのである。心の安らぐ場所がどこにもなかった。すべてはそれは自己中心のものであった。

放蕩息子はどうにもならない窮状の中で悔い改めに迫られ、あの広くて大きな父親の愛に目覚めた。そして百八十度向きを変え父親のもとに帰ったのである。彼はいまや息子と

してではなく、使用人の一人にしてもらうことさえ願って、身を低くして父親のもとに帰っていった。

父親の愛に目覚めた彼と全く同じで、神は頑なな私の心を溶かし、破綻した私を修復し、無限に広く大きな愛の力によってまことの平安を与えてくださった。

これこそ見返りを何一つ望まない、与え尽くす愛であった。これこそ人間の思いをはるかに超えた、人の物差しでは測ることのできない神の愛であった。それからはもう妬みや憎しみが私をわずらわすことはなくなった。

クリスマスの時だけではなく、いつでも、また何をさしおいても、第一に尊ばれるべきお方。それが限らない忍耐と愛をもって私に迫り続けてくださった、私の主、私の神である。

まして、クリスマスにはこのお方への特別な思いがある。このお方こそ、今から二千年以上も前に、ユダヤの地ベツレヘムの馬小屋で、しかも飼い葉おけの中でお生まれになられた、神の御子イエス・キリストである。

クリスマスこそ、このお方を思つて静思の時を持ちたいと思う。

『この方こそ、私たちの救い主イエス・キリストです』聖書

声

西山純子

それは北風の吹く特別に寒い夜だった。

震えながら私たちは星空を見上げ、クリスマスの讃美歌を歌っていた。

大病院の裏庭から見あげる病棟の窓の明かりが幾つか灯されて「ありがとう。私、ここで聞いていますよ」と入院されている方々が応えてくださっているような気持ちをいただいていた。

高校三年のクリスマス・イヴ、私たちは例年のように自転車に相乗りして、病で臥し礼拝に來ることの適わない方のお宅をキャロリングした。

その最後に、大病院に入院している何人かをおぼえ、ひっそりとした病院の裏庭で讃美する許可を得て、其処で歌わせていただいていた。

現在は整備されて、あの頃の面影のない裏庭は、当時はかなり放置されていたのか荒地で、冬枯れの草木が私の背の高さまであった。

私たちは肩を寄せ合うようにしてクリスマス讃美を次々と捧げた。

歌い続けていたクリスマス讃美の何曲目であつたらうか。私たちは風の音に混じって何

か不思議な音を聴いた。

その音は荒地の向こうから、私たちに迫るように聞こえた。

歌いながら皆は耳を一点に集中しつづけていた。

それは人の声だ。歌声だ。しかも、私たちの讃美している曲だと、だんだんにわかった。私の胸はドキドキ動悸して、震えた。緊張した。

暗闇の中から長身の青年が美しいテノールの声で讃美に合わせながら、ゆっくり近づいてくるのが見えた。

彼は盲目の青年だった。荒地の先に盲学校の寮があり、彼はそこで風に乗って聞こえてきた私たちの讃美歌に惹かれて暗闇の中、引き寄せられて来たそうだ。

思わず手を取り合つて喜びあい、彼を交えて更に讃美を捧げた。

神は視力を失つた彼に恐れを与えず迷わず導かれたのだと、私は驚きと喜びで胸が熱くなり、感謝で満たされた。

讃美歌を歌う私たちに寄り添って下さり、盲目の青年には愛をもって讃える声の場所まで導いて下さったのだ。

決して忘れることのないクリスマス・イヴだった。

神の恩寵

篠田一志

罪の報酬は「死」と言うが、信仰の報酬は「神に感謝する心」だと思ふ。

信仰によって、天地万物を創造なさったお方が神であり、すべての被造物が神の恩寵の中にあると知るからだ。

四季折々の自然の営みや複雑な人間関係の回復を見ると、また日常の生活のなかで経済や健康が守られるなど、目に見えるところに神の恩寵はある。

一方、壊れた心の先にあるはずの絶望が回復の希望に変えられるなど、見えないところに働く不思議な力も神の恩寵なのだ。

こうして、目に見える不幸が、見えないところに恩寵を与える手段に用いられることが神の恩寵と知るとき、神への感謝は驚きに変わっていく。

これらの恩寵は信仰によって知る喜びであり、「神に感謝する心」に導かれる。

何事にも頂点がある。感謝の驚きにも頂点がある。それがクリスマスであろう。クリスマスこそ、御子イエスを人の子として、この地に送って下さった驚くべき神の恩寵である。

私はそう確信して、神に感謝している。

タッタとタンタ

土筆文香

タッタとタンタはようくんのくつしたです。タッタ、タンタ、タラッタラッタ、タンタようくんの足にはかかれるとタッタとタンタはうれしくてうたいます。

ようくんがねむっていると、なきごえが聞こえてきました。ふとんの上にくつしたのたほうがピクピク動いています。

「どうしたの？」

「ぼく、タッタ。弟のタンタがつれていかれちゃったんだよう」

ようくんはくつしたをぬいだとき、かたほうづつほうり投げたことを思い出しました。

「ネズミがタンタをくわえて走るのをみたんだ」「えっ、ネズミが？」

ようくんはびっくりしました。

「このへやは、ネズミの通り道になっているんだ。ベッドの下をみてごらん」

ようくんがベッドの下をのぞくと、緑色のラインがみえました。ラインはつくえの下を通り、かべのところで消えています。

「ラインをたどっていくと、かべを通りぬけられるんだ。かべの向こうに別の世界がある」

「別の世界？」

「ぼくをポケットに入れて、ラインの上を歩

いて」

ようくんは、つくえの下にもぐってラインの上を進み、かべにつきあたりました。すると、いつの間にかかべを通りぬけていました。そこはまぶしいほど明るくて、青空の下に雪の原っぱがどこまでも広がっています。はだしの足が冷たくて、ようくんは足を上げたりおろしたりしました。

向こうに小屋がみえます。

「ネズミはきつとあの小屋にいる」

タッタがポケットでモコモコ動きまわりました。

ようくんは足が冷たいのをがまんして雪の上を歩きました。

小屋の戸を開けると、ネズミたちが輪になっていて、その真ん中にタンタがいました。

「ぼくのくつした、返して」

ようくんが持ち上げると、キーキーと声が出ました。タンタの中にネズミの赤ちゃんが三びき入っていたのです。

「今年はとくべつ寒い冬で、子どもが何びきも死んだんだ」

「でも、これがあると子どもいのちが助かるの。かしてもらえないかしら」

父さんと母さんネズミが前足をすり合わせました。

「ぼくはかまわないけど、タッタは？」

ようくんがタッタをポケットから出すと、

タツタはピクピクうなずきました。

父さんネズミがタツタをみつめました。

「もうひとつのくつしたさんも、かしてくれないか」

みると、ふるえているネズミの赤ちゃんがもう三びきました。

タツタまでかしたら、ひとりぼっちになっ
てしまいます。ようくんが迷っていると、

「ぼくもネズミさんをあたたためてあげたい」
タツタがいました。

ようくんは、タツタをネズミにさし出しま
した。なみだがほおを伝わり、しよっぱい味
が口に広がりました。

小屋を出ると外は雪がふっていました。よ
うくんは、急に心細くなりました。家に帰る
にも雪の原ばかりで帰り道がわかりません。

風がふいて、ふぶきになりました。体がこ
おりそうです。一歩も歩けなくなつて、雪の
上に倒れてしまいました。

ザックザックと足音がして、だれかが近づ
いてきました。その人は、赤いふくを着て赤
いぼうしをかぶり、白いひげの……サンタさ
んです。

サンタさんは大きな手を広げてようくんを
だき上げ、ふところに入れました。サンタさ
んの上着の中はふわふわであたたかです。

「今日はクリスマスなの？」

ようくんがたずねると、サンタさんはうな
ずきました。

「ようくんはクリスマスにいいことをしたね」
「いいこと？」

「タツタとタンタをネズミにかしてあげたじ
やないか」

「サンタさん、みてたの？」
サンタさんはにっこり笑いました。

「クリスマスはプレゼントをもらうより、あ
げる人の方が幸せになるんだよ」

ようくんはほっとしてサンタさんにだかれ
てねむりました。

目がさめると自分のベッドにいました。ま
くらもとに二つのくつしたがおいてあります。
タツタとタンタです。くつしたの中にたくさ
んのおかしが詰められていました。

「ネズミさんたちはどうしたの？」
「元気で大きくなったよ。春になったから、
サンタさんに連れられて帰ってきましたんだ」

タツタとタンタが口をそろえました。かべ
の向こうでは時間のたつのが早いのです。
ようくんは、おかしを分けて家族のみんな
にプレゼントしました。ネズミのためにライ
ンの上にもおきました。

タツタとタンタは、ひさしぶりにようくん
にはかれて、うれしそうにうたいます。
タツタ、タンタ、タラッタラッタ、タンタ。

クリスマス祝会の裏方

三浦喜代子

母は毎年教会のクリスマス祝会のために数
日前から支度を始める。ニシンの昆布巻きを
作るためである。

「今年は大鍋を買ったから、百本は大丈夫」
いそいそとうれしそうである。私は半分戸

惑いながらも、苦笑しながら任せている。
母はまだクリスマスチャンではない。祝会のため

に骨はおろすが、礼拝にも祝会の席にも出た
ことはない。誘っても決まって「わたしはい
いわ」と断り続けるのだ。

張り切っている母のかたわらで、私はケー
キ作りに励む。同じく百個を目指す。

二人の娘たちが中学生のころ、所属する教
会はいちばん盛んであった。付属の幼稚園や
教会学校は百名を超える子どもたちで賑わい、
教会員も増え続け、下町の小さな教会ははち
きれんばかりであった。

クリスマス礼拝のその日、恒例の祝会は夕
方六時から開かれる。教会員の他に家族や友
人を招いてもよかつた。

牧師はここぞとばかりクリスマスのメッセ
ージを熱く語った。そのあとは待ちに待った
食事会になる。こここそ、婦人会の出番であ
った。そのころは中年の現役主婦たちが大勢

いた。教会の小さな台所では作業ができない。そこで分担して家庭で作り、持ち寄った。

母の昆布巻きはその一つであった。これが大好評を博した。たしかにおいしい。毎年我が家のおせちの定番でもある。

こうして母は何年ものあいだ、クリスマス祝会の裏方として奉仕した。

しかし私のただ一つの願いは母が救われることであつた。こんなに教会に好意を抱いているのだから、その日が来るのも時間の問題だと簡単に考えていた。

ところがむなしくも十年、二十年が過ぎていった。いつになったら母は信じるのだろうか。老いの目立ってきた母を見て不安が募った。

八八歳の時、激しく体調が崩れた。母はある夜、突然、私を呼んで緊張した顔で言った。

「わたしは、イエス様を信じる」

神様が母を動かしたと信じ、教会へ走って行って先生をお連れし、告白の真偽を確かめ、導いていただいた。

数日後、教会ではなくクリスマスでもなかったが、洗礼式が行われた。我が家には入りきれないほどの多くの方々が参列し、祝ってくださいました。この日、母は裏方でなく表舞台のヒロインになった。

二年半後、母は奇しくも一二月二五日の早朝、天に帰っていった。

ニューヨークの祈り

白井淳一

平成一三年九月一日に、アラブ系のグループによってハイジャックされた二機の旅客機がニューヨークの超高層ビル・世界貿易センターに突入し、爆発炎上した。一機は、ツインタワー北棟に突入し、もう一機は南棟（いずれも一〇九階建）に突入した。この無差別テロ事件による死者は、確認された人数だけで二、六〇二人と報告されている。この大惨事の映像がリアルタイムで生中継され、世界中の人びとがテレビの前に釘付けになった。私も固唾を呑んでその一部始終を見た。

ある日、新聞を読んでいた妻が、

「ちよつと、あなた、《四泊五日 ニューヨーク観光 39,8》でMISの広告が出て

いるわヨ！ サン・キュ・パ（三万九千八百円）ですつて」と話し掛けてきた。

悲惨なテロ事件が起こった後なので、観光客の足がすっかり遠退いてしまったらしい。

「行く気なのかネ？」と尋ねると、妻は

「でも、すぐく安いじゃない」と言いつつ、行きたい気持を露わにしていた。

「危険だから駄目だよ！」と私は、あっさり会話を打ち切ってしまった。

それから数日して、今度は私の方から口火

を切った。妻に、

「やっぱりニューヨークへ行こう！ テロ事件の後だから治安体制は万全なはずだ」と言い、ニューヨーク行きが決まった。

ニューヨークのケネディ空港ロビーに妻と二人で立ったのは、その年の一月二八日の午後だった。広々とした明るいロビーで、最初に目にした光景は、大きなガラス張の前に立って目を光らせている、自動小銃を構えた二人の若い軍人の姿だった。

私は、日本で想像していた通りの警備体制を感じ取った。空港からホテルに向かうバスの窓からも随所に立っている警察官や警備員の姿が見えた。

滞在するホテルは、ブロードウェイ沿いのタイムズスクエア近くにあつた。

ニューヨークに着いて最初に訪れたのは、脳裏にこびりついていた前代未聞の衝撃的な映像の現場だった。観光気分にかけて現場に向かった。

現場は、危険防止・立入禁止のフェンスが張り巡らされ、犠牲者の写真や花束、生前の思い出の品々、遺品などがぎっしりと飾られていた。フェンスの内側は、まるで沈静化した大きな噴火口のような様相を呈していた。奈落の底のうごめきの様なものを感じ、身震いした。その中にフラフラと吸い込まれて

しまいそうな気分にも襲われた。

私は、徐々に立ち居場所を失い、幻惑状態に陥ってしまった。

気が付くと、両手の指を固く組んで、「父なる神様！ 主よ！ 不慮の死を遂げた魂に平安を、鎮魂の御業を……その家族に癒しの御業を……」と真摯に祈っている自分の姿があった。

そして、奇跡を見た。事故現場に隣接する所に、まさしく難を逃れた小さな教会があった。祈りのシンボル、平安と慰めのシンボルとして残された教会堂があったのだ。

短い旅程の合間に、ロックフェラーセンターに設置された大きなクリスマスツリーにジョージ・ブッシュ大統領夫人による点灯式が挙行されるセレモニーに参加する幸運に恵まれた。それはニューヨーク市民の希望と期待に満ちた記念すべき点灯の夕べだった。

新聞広告に端を発した観光旅行は、ブロードウェイ散策、劇場での「アイーダ」観劇などを初め、タイムズスクエア、ティファニー、エンパイア・ステート・ビル展望台、自由の女神、メトロポリタン美術館、セントラルパーク等々を巡る安全と無事、感謝に満ちたものとなった。

初めてのクリスマス・イヴ

長谷川和子

初めてキリスト教に触れたのは、ルーテル通信講座を通して、十日町教会を訪ねた一七歳のときだと思っていた。

最近さらに遠い昔の出来事を鮮明に思い出した。突然天から降ってきたように、五十年前の一月二四日、ある家庭に招かれたときのことである。

当時名古屋

屋に住んでいた私は、勤務先の先輩女性から「今晩家に来いへん」と声をかけられた。

女性はゼロ歳児を抱えており、昼休みになると姑がおんぶして来た赤子にお乳を含ませていた。

(赤ちゃんがいるのに働くなんて、すごい)と感心していた。

内気で人と会話も十分にできない私をなぜ誘ってくれたのかわからなかったが、お宅に伺うと小父さんが出迎え、部屋に通され



た。小父さんは舅だと後で気づいた。

薄暗い部屋にロウソクの炎が揺れていた。小父さんは分厚い本を開き朗読した。その場面だけが思い出される。祈りがあつたのか食事をしたのか覚えていない。

異様な空気であつたが居心地がよかつたと覚えていて。わけがわからない夜であつたが、今思えば本は聖書であり、小父さんはクリスマスチャンだつたのだ。招かれたのは私一人だつたがご家族とクリスマス・イヴを祝つたことになる。

何もわからない私のところまで神様は降りてきてくださり、小父さんを通してキリストの愛を伝えられたのだと、今思える。

この夜のことはすっかり忘れてしまったが、四年後に私は洗礼を受けた。

あの夜のイヴを思い出したことは、宝物を見出したようで、感慨深い思いに浸つた。

小父さんは今の私より若かつたと思う。あの時まかれた種が実を結んだことを知らせたいと思うが、お名前も住所も覚えていない。残念でならない。おそらくすでに天上の人となつてしまっただろう。

家に誘つてくださった先輩女性に会うことができたなら、信仰を得たことをお伝えしたいと切に願っている。

勇気を出して

島本耀子

無宗教の家庭で育った私には、クリスマスとは全く縁がありませんでした。クリスマス・プレゼントを担いだサンタクロースが、屋根の上の大きな煙突から入るのを、戦後生まれの年の離れた妹や弟の絵本で初めて見ました。

我が家の風呂場の細い煙突ではとても無理だと、無情な私は笑いましたが、朝目覚めた時の枕元に、人形やおもちがあつた、正月のお年玉と同じだと思えたからです。

初めてのクリスマス会は、妹が通うお寺経営の幼稚園でした。忙しい母の代わりに私が付き添いましたが、ご住職は、宗旨は違ってもイエス様は偉いお人だからとのこと、本堂にツリーを飾って祝いました。

それ以後も、イエス様不在のクリスマス会は何度か経験しましたが、長い間私には、クリスマスとはプレゼントのやり取りをして、ロースト・チキンやケーキで祝うものという認識しかありませんでした。

それでも、娘をキリスト教系の中学校に入学させたのは、女の子に相応しい所と思ったからですが、家族に来た異端の誘いから抜けさせるために、無信仰の私は苦しみました。

校長先生のご指導で、PTAのキリスト教

研究会が、小さな礼拝の形式をもって行われていました。ここで、聖書にある真実を初めて知り、私はやっとイエス・キリストに出会うことが出来ました。

私たちを愛して、身代わりになるために、神さまは御子イエス・キリストをこの世に送って下さった。クリスマスはその誕生を祝うものだと、知りました。

ある時校長先生は、勇気を出して一度近くの教会へ行つてごらんなさい。と、おっしゃいました。夫も行くというので、いつしよに行つてみましたら、教会は暖かく私たちを迎えてくれました。教会行きに、何の勇気がいるものかと、拍子抜けするほどでした。

一年半ほど通つて洗礼を受けましたが、聖餐式のパンとブドウ液が、目の前を素通りしてしまうのに耐えられなくなった時、私はすでにイエス・キリストに捉えられていたのです。

校長先生に受洗の報告をすると、先生は私の手を取って心から喜んでくださいました。先生の一言ずつが身に染みて思い返されます。今はすでに天に召されていますが、私を信仰に導いた暖かい手でした。

私のすべては神様のご計画によると知りましたが、信仰によって生きる勇気を頂き、感謝しています。

最高のプレゼント

安東奈穂美

子どもの頃、親からクリスマスプレゼントをもらった記憶はありません。それらしきものと言えば、きらびやかな模様のブーツにお菓子を詰め合わせたものくらいでしょうか。足を入れてみた時の厚紙の感触をうっすらと覚えています。

中学生になつてから教会に通い始め、三年生の時に洗礼を受ける決心をしました。両親に、洗礼式に来てほしいと言いましたが、全く関心がなさそうです。

「結婚は二回できるけど、洗礼は一回だけだから」

と、私は妙な理屈で強く頼みました。でも、期待はしませんでした。

クリスマス礼拝の日、礼拝堂の前に出て洗礼を受けました。

「汝の罪、赦されたり」

牧師の力強い宣言を聞くと、聖なるものに包み込まれるのを感じて涙が溢れてきました。一緒に洗礼を受けた人達と、礼拝に出席している人に紹介されるため、会衆席の方を向きしました。私の目に飛び込んできたのは、なんと母の顔でした。いつの間に来たのか、前の席にいました。隣には父親も座っています。

まさか来てくれるとは思わなかったので本

当に驚きました。

(ああ、来てくれたんだ)

幼子が母親の元へ駆け出すときの、恋しくてたまらないような気持ちでした。もう、顔は涙でクシャクシャでした。

三年後、母は突然この世を去りました。私は、文字通りの茫然自失でかろうじて生きていました。それまで、全く家の手伝いをしな



かったので、些細な家事でも、なぜ自分がこんなことをしているのだろうと、さらに胸が痛むのでした。死とは、限りなく現実的なものなのだとなりました。

母に見せたかった姿が幾つもあります。結婚式に出てほしかった、子どもを抱いてほしかった、クリスマスのお祝いも一緒にしたかった……。

それでも、あのクリスマスの日、母は父と共に私の洗礼を見届けてくれました。信者でなくとも、感じるころがあったのでしょうか、母は涙を流していました。

もう会うことのできない母は、私に最高のクリスマスプレゼントを与えてくれたのです。

編集後記

★「降誕号」と銘して35号を無事にお届けでき、ホッとしています／寄稿募集から締切まで、わずか二〇日をもとせずつ作品を寄せてくださったお一人お一人に深く感謝します／「書けよ、証しせよ」と励まされる神の一押しがあったればこそでしょう／一つの作品が「文は信なり」というツリーを飾るオーナメントのようにきらめき、読者の心をひきつけ、イエス・キリストを照らす灯になりますようにと祈ります／『布にくるまつて飼ひ葉おけに寝ておられるみどり子を見つけます』／皆様のうえにキリストの平和がありますように祈ります。(M・K)

★木枯らしが吹きはじめ年末が近づくと、街にはクリスマスモードが漂ってきます／頑なだったときの私は、冷ややかに見るばかりでしたが、今は感謝の思いを新たに作る時期となつています／世界の暦は、キリスト教の立場から創られて、天地創造のひそみに倣つて人は働き、休みます／唯一の神である主を知らず拒否する人の上にも公平に、風は吹き、暖かい陽の光が降り注ぎます／イエス・キリストを信じた人には、神の国が約束されています／私たちの一文が、その入り口となりますように、祈りつつ編みました。(Y S)

日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)の自己紹介・2017年は65周年！！

起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

活動は3つのブロックで行っています。★関東ブロック(関東以北の地域)★中部ブロック(名古屋周辺地域)★関西ブロック(大阪周辺と西の地域)です。

活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最近では関東が『春夏秋冬』、関西が『種を蒔く4号』を発行しました。

また Web 上にホームページを開いています。(URL <http://jcp.daa.jp>)

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはHPのアドレスにご連絡ください。関東、関西は隔月に例会を開いています。案内はHPに掲載します。なお本誌「文は信なり」は関東ブロックが年2回ほど発行しています。HPにも掲載します。